

[成果情報名] ジャガイモそうか病の種いも伝染リスク

[要約] 一般に流通し生産者が購入する種いもと健全圃場から自家採種した外見健全な種いもは同じ程度にそうか病の伝染リスクを有しており、種いも消毒によりリスクが軽減できる。

[キーワード] バレイショ、ジャガイモそうか病、種いも伝染

[担当] 長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・馬鈴薯研究室

[連絡先] (直通)0957-36-0043

[区分] いも類

[分類] 指導

[作成年度] 2018 年度

[背景・ねらい]

県内外のばれいしょ産地で恒常的に問題となっているジャガイモそうか病は、発生要因として土壌伝染と種いも伝染の2経路が示されている。本県では土壌伝染の防止を図るためクロルピクリン剤等による土壌消毒が慣行的に利用されているが、種いも伝染に対する予防対策としての種いも消毒は、過去のアンケート調査（平成17年、未発表）によると概ね3～4割の実施率に止まっている。ここでは、種いも伝染防止対策の実施率の向上を図ることを目的として、実際に生産者が使用する購入種いもや生産者の自家採種いもを供試し、新生塊茎の発病程度から種いも伝染によるリスクについて検討を加えた。

[成果の内容・特徴]

1. 春作マルチ栽培において、クロルピクリン剤処理圃場の外見健全種いもおよび市販種いもの約5割でそうか病の種いも伝染が認められる。（図1）。また、新生塊茎（子いも）の種いも伝染による発病程度は、種いもの来歴によって異なる（図2）。
2. 秋作普通栽培において、そうか病発生圃場の外見健全種いもに由来する子いもの発病度に比べ、クロルピクリン剤処理圃場の外見健全種いも、市販種いもおよび生産者が自家採種した種いもではやや低いものの同程度の発病が認められる。また、種いも消毒（F剤）により発病度はさらに低下する（図3）。

[成果の活用面・留意点]

1. 春作試験では、無消毒の供試種いもをクロルピクリン剤処理圃場に植付け、発病の有無から種いものそうか病伝染リスクを推定している。
2. 試験で使用した種いも消毒（F剤）はフルアジナム水和剤（商品名；フロンサイドSC）の100倍希釈、瞬間浸漬処理である。

[具体的データ]

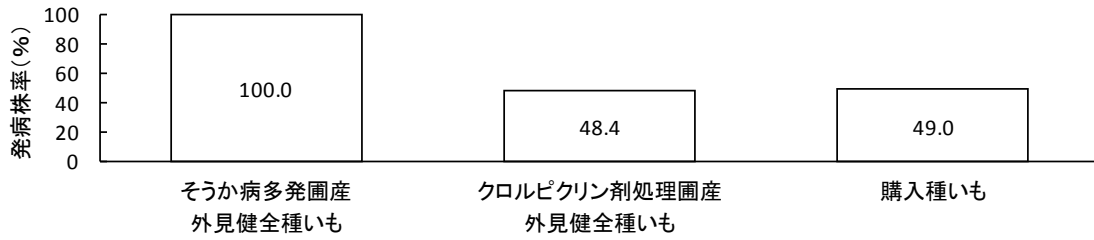


図1 種いもの来歴によるジャガイモそうか病の発病株率の差異(2018年春作マルチ栽培)

注) 購入種いもは、購入後植付まで貯蔵庫に保管し、他は温蔵処理を行った

収穫時に株単位で調査し、新生いもにそうか病の発生が認められた種いもの割合を発病株率とした

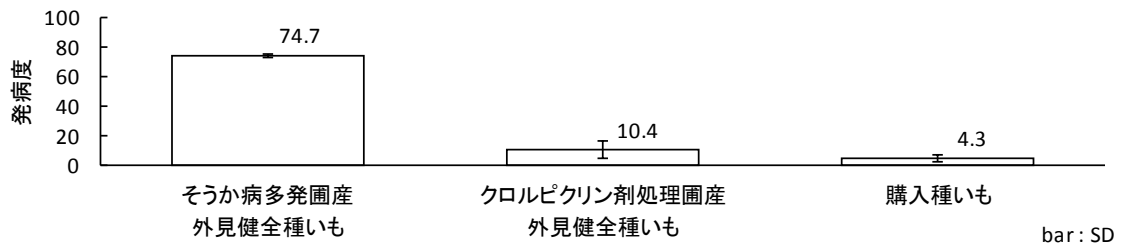


図2 種いもの来歴によるジャガイモそうか病の発病度の差異(2018年春作マルチ栽培)

注) 各区15株(3反復調査)の収穫塊茎について、そうか病を程度別(5段階:0、0.5、1、2、3、4)に

調査し、発病度 = $\sum(\text{各発病程度指数} \times \text{程度別塊茎数}) / (4 \times \text{調査塊茎数}) \times 100$ を算出した

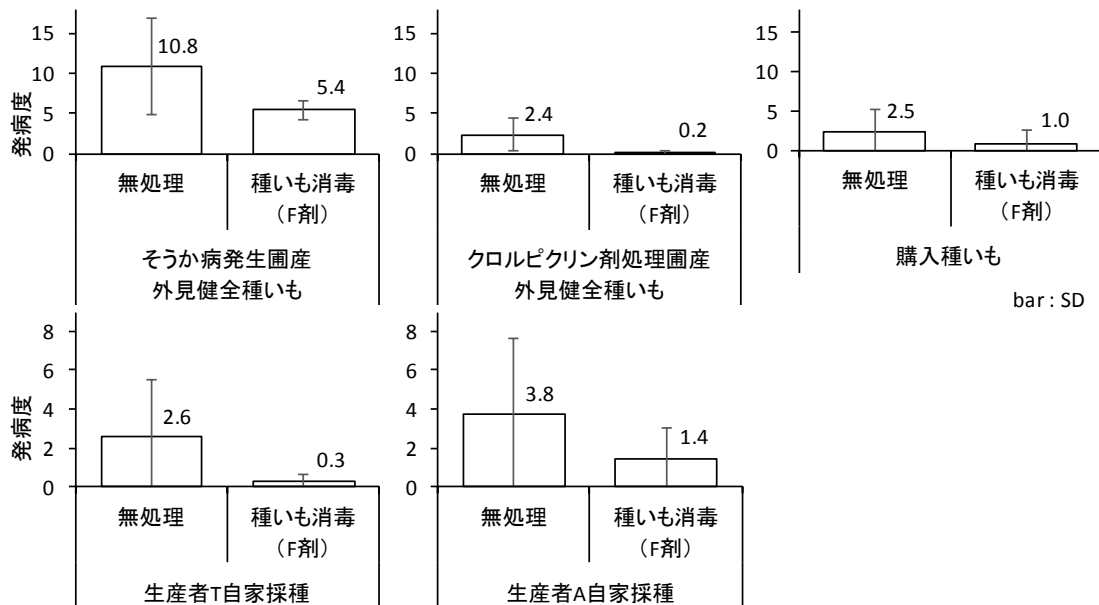


図3 種いもの来歴によるジャガイモそうか病の発病度の差異(2018年秋作普通栽培)

注) 各区15株(4反復調査)の収穫塊茎について、そうか病を程度別(5段階:0、0.5、1、2、3、4)に

調査し、発病度 = $\sum(\text{各発病程度指数} \times \text{程度別塊茎数}) / (4 \times \text{調査塊茎数}) \times 100$ を算出した

[その他]

研究科題名 : ジャガイモ病害虫に対する新農薬の作用機作

予算区分 : 県単 (受託)

研究期間 : 1972年～

研究担当者 : 菅 康弘